奈良今昔写真 WEB 蔵

率川と伝香寺橋

昭和 28 年頃

伝香寺前より

写真提供：伝香寺

読売新聞「奈良版　元旦特集」

平成 29 年 1 月 1 日発行

『奈良を照らす』映画監督　河瀬　直美さん

1300年前の人々とつながる場所

映画監督　河瀬　直美　さん

ならブランド 1

厳冬の朝、春日大社（奈良市）の参道は霧に包まれていた。奥の本殿へ続く薄暗い道の脇には、時代を感じさせる石灯籠が並ぶ。徐々に角度を増す日差しが木々の間から差し込むと、草を食む鹿の輪郭が黄金色に浮かび上がった。

映画監督の河瀬直美さん（47）はこの一帯を、親しみを込めて「春日さん」と呼ぶ。幼少期の遊び場は、土の匂いも独特の湿気も、当時のまま。だが今では、ここに立つたびに胸が熱くなる。

時を越え、それぞれの思いを抱えて歩む、あまたの参拝者たちの姿が浮かんでくるからだ。河瀬さん自身、「私もまた、長い時間の一部だ」と思うようになったという。

＊

専門学校を卒業後、大阪の映像制作会社に就職した。高層ビルが林立する街でめまぐるしく過ぎる日々。疲れ果てて奈良に戻ると、三笠山にぽっかりと浮かぶ月が癒やしてくれる。奈良に流れるゆったりとした時間を実感した。

猿沢池の南側を流れる用水路に気付いたのは、ちょうどそのころ。水路にかかる石橋から見下ろすと、舟形の中洲に数十体の地蔵と「率川」と記された碑があった。

春日山から佐保川まで、全長わずか4キロ弱。万葉集にも詠まれた由緒ある川は、今では大半が暗渠になった。ただが、道沿いには「絵屋橋」「柳橋」「長幸橋」と刻まれた石の親柱が残る。耳を澄ますと、せせらぎとにぎわいが聞こえるような気がした。

平城宮跡から見る生駒山の夕照、旧市街の路地裏に漂う夕食の香り。この地に重層的に積み重なった、膨大な時間に思いが至った瞬間、名も無き石仏にも、何げない通り名にさえも、「色んな物語が隠れていることに気づいた」。

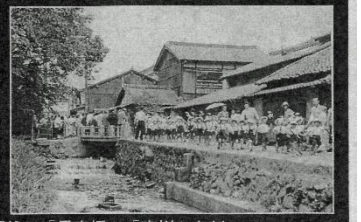
＊

「人々が遺し、思いを刻んだものを題材に、映画を撮りたい。目に見えない思いまで、映像にしたい」

計画が頓挫し、一度も列車が走らなかった西吉野村（現・五條市）のトンネルに想を得た「萌の朱雀」（1997年）は、そんな思いの延長にあった。飛鳥を舞台にした「朱花の月」（2011年）では、大和三山の神々が恋争いをしたという万葉集の歌をモチーフにした。

「大都市と比べると、奈良は不完全な街かもしれない。でも、その隙間から1300年前の人々とつながることができる場所。橋渡し役として、私はここで映画を撮っているんだと思う」（冨野洋平）

奈良市内の公園で撮影する河瀬さん（左）



左 十字路の角にポツリと残る石の親柱。「長幸橋」「率川」と刻まれた文字が残る（奈良市で）右 かつて伝香寺前を流れていた率川。現在はやすらぎの道が整備されている―1953年、伝香寺提供